

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第841号 平成26年11月27日

学長選と教職員投票

北海道教育大学では、外部有識者も入った学長選考会議において、「学長は選考会の責任と権限で決めるべきだ」として教職員による「意向投票」を次期選考から廃止する方針を決めました（10月23日付読売新聞他）が、道内の国立大学では初という事もあり、学内外で議論を呼んでいます。

今回の決定に対する批判的な声は、10月26日付北海道新聞の「密室の決定『自治脅かす』」という記事に集約されるように思います。

その論旨は、学長選考会議は非公開で開かれ、教職員の傍聴も認められていない事から、大学の重大事を決める議論が「密室」で行われる事になり、北海道教育大学の教職員の間には「大学の自治を脅かすものだ」といった反発の声が根強くあるというものです。

国立大学の学長については、学外有識者も含めた学長選考会議が、自らの権限と責任により学長の適任者を学内外から選考する事とされており、また、多くの国立大学では、学長選考会議における選考の参考とするため、9割以上の大学で学内意向投票が行われています。

北海道教育大学も、基本的に同様の手続きを踏んで学長が選考されて来ましたが、2011年の学長選考において、学長選考会議が「立候補者との面接等を踏まえた結果」として、学内意向投票では2位であった本間謙二氏の再任を決定し、その後、その決定が裁判で争われた事は記憶に新しいところです。

学内では、学長選考に自分達の意思が反映されない事や学長の力が大きくなる事への反発があるのだと思います。

確かに、学長選考が、例えば文部科学省の意向に左右されるという事になれば、大学の自治の面からも明らかに問題だと思います。

しかし、今回の決定に対して教職員から「大学の自治を脅かす」という批判の声が出ている事に関していえば、脅かされるのは「大学の自治」ではなく「教職員達の自治」というべきではないかと思います。というのは、教職員は「大学の自治」を表看板にしていますが、実質は「自分達で気に入った人を学長にしたい」という事であり、それが今回の決定によって覆される事への反発があるのではないかと、私には思えるからです。

学内意向投票は、いってみれば教職員による人気投票といって良いでしょう。教

職員の人気投票で選ばれた学長が、果たして大学経営に厳しい姿勢で臨めるでしょうか。まして、自ら血を流すような大胆な改革が出来るかとなると、疑問符を付けざるを得ません。

会社の社長を社員の人気投票で選ぶという話は、聞いた事はありません。会社と大学を一緒にするのは不謹慎だという批判の声も聞こえそうですが、如何に最高学府といえども、そこには中長期を見通した、しっかりとした経営哲学を以て大学を運営して行くリーダーは不可欠だと思っています。

学長選考会議が、参考意見として教職員の意向を聞くという事を否定するものではありませんが、学外有識者を含めた第三者機関において、学内外から学長に相応しい、力量ある人材を選考するというシステム自体は、時代の要請するところではないかと思っています。(塾頭：吉田 洋一)